

樹木が集団で枯れる「ナラ枯れ」 ～ミクロとマクロの視点から

日時

令和8年

2月10日(火)

19:00～20:30

会場

愛媛大学 松山市文京町3番

E.U. Regional Commons

(ひめテラス)1階

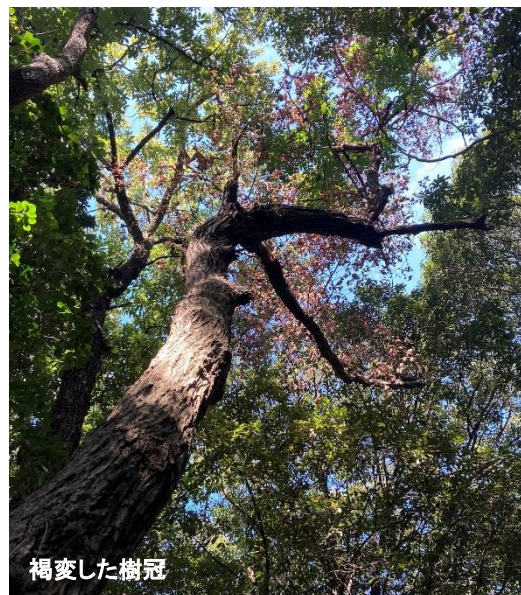


対象

自然に関心がある方30人

参加無料

愛媛大学森林資源
生物研究室が三浦
保愛基金の助成を
受けて実施します



褐変した樹冠

ナラ類やカシ・シイ類が集団で枯れるナラ枯れという樹病があります。全国で深刻な被害が出ており、愛媛県でも数年前から見られるようになりました。飛翔する甲虫(カシノナガキクイムシ、以下カシナガ)が媒介する菌による伝染病で、カシナガが幹に集団で穿入した後に、樹冠の葉が全て萎れて枯れると枯死に至ります。しかし、カシナガが穿入した樹木が必ず枯死するわけではありません。ナラ枯れには、ミクロな要因(幹の中の作り)とマクロな背景(森林の状態など)とがあり、これらを理解することは、今後の森林と人間との関係を考える上でも重要です。

今回は、一昨年頃からカシナガの被害が見られ始めた城山樹叢での状況を例に、ミクロとマクロの視点からナラ枯れのメカニズムについてお話しします。

◆話題提供 鍋嶋 絵里 さん

愛媛大学農学部森林資源学コース准教授。博士(農学)。

北海道大学で院生・ポスドクの7年間を過ごしたあと、東京農工大学で助教(女性研究者支援)、学振研究員(RPD)を経て12年前から愛媛大学へ。専門は樹木の生理生態で、幹の成長の環境応答や年輪変動のメカニズムに関する研究のほか、高木の樹冠にアクセスするクレーンやツリークライミングによる林冠研究も行ってきた。対象は落葉広葉樹種が中心で、カエデ、ミズナラ、ブナなど。現在は人工林の広葉樹林化など森林の更新に関する研究を中心に進めている。

【お申し込み】

お名前、住所(市町まで)

を e-mailアドレス

info@morimichi.org

にお知らせください。

※当日参加OKですが、準備の都合上、事前申込にご協力ください。

※個人情報
は適正に管理し、
当事業関係の
連絡にのみ使
用します。



Web申込

穿孔を受けた幹



堆積したフラス

